

## 論文

# 立命館アジア太平洋大学の国際学生の食生活の実態と 生協事業の課題についての考察

磯崎 修治 (立命館生活協同組合 立命館ア  
ジア太平洋大学ショップ店長)  
伊藤 昇 (大学行政研究・研修  
センター専任研究員)  
酒井 克彦 (立命館生活協同  
組合 専務理事)

### I. 研究の背景

1. 留学生の増加と大学生協の対応の遅れ
2. 立命館アジア太平洋大学での立命館生協の取組
3. 立命館大学の「グローバル 30」採択と立命館生協
4. 国際学生の日常生活に関する詳細な実態調査の必要性について
5. 先行調査から見える立命館 APU 国際学生の食生活の概要

### II. 研究の目的

### III. 研究の方法

### IV. 調査・分析

1. 国際学生を対象とするアンケート調査
2. 調査のまとめ

### V. 研究のまとめ

### VI. 残された課題

1. 調査結果について
2. 食と健康の提案活動について

## I. 研究の背景

### 1. 留学生<sup>注1)</sup>の増加と大学生生活協同組合の対応の遅れ

「留学生受け入れ 10 万人計画」後、大学の本格的な国際化の推進や、入学定員を埋める「経営対策」としての留学生受け入れなど大学の様々な事情や政策により、多くの留学生が日本の大学で学ぶ機会が増えてきた。それと同時に、留学生の奨学金問題、言語能力や授業についていけない問題、文化摩擦や学内の日本人との交流やコミュニケーション不足問題、就職問題などが発生することになり、大学は早くから対応して取り組んできた<sup>注2)</sup>。他方、多くの大学生生活協同組合（以下、大学生協という）では、留学生同士の交流活動やバザーなどの留学生委員会の取組みが中心であった。

しかし、ようやくこの数年で京都大学<sup>注3)</sup>など旧帝国大学での生協食堂を中心にムスリム対応のハラールメニュー<sup>注4)</sup>の提供が広がりを見せ始めている。留学生の数的増加とともに出身国・地域や宗教、文化が多様化するに

つれ、学内では宗教戒律や食習慣に対応した食事を摂ることができず、大きなストレスを抱えたまま日本での留学生活を送らざるを得ない留学生も多い。こうした留学生にとっては、日本で「生きる＝食べる」ことに関心がまさに「生きるか死ぬか」の問題になっている。とりわけムスリム学生の運動を通じて実現した食堂でのハラールメニューの提供がこうした問題の象徴として取り上げられるようになっている。

留学生を日本に迎え入れる前に生活環境面での受け入れ態勢が整備され、その情報が事前に提供されれば、国際的な留学生獲得競争の下で、優秀な留学生が日本での留学の準備を安心してすすめ、成果を上げられることにつながると考えられる。

### 2. 立命館アジア太平洋大学での立命館生活協同組合の取組み

大分県別府市の高台に立地する立命館アジア太平洋大学（以下、APU という）では、2010 年 11 月現在、88

カ国から2,837名の国際学生が学んでいる。立命館生活協同組合（以下、立命館生協という）は、APUの2000年4月開学以来、国際学生の要望や協力によるハラルやエスニック料理の食堂での提供、ショートニングの入っていない食パンの品揃え<sup>注5)</sup>、価格等の日本語と英語の2言語表記、生協加入時に国内銀行口座開設用の印鑑プレゼント、伝統的な田植え・稲刈り体験会と収穫祭の開催、食生活相談会、積極的なアルバイト採用など、国際学生が困っていることへの対応や交流の取組みを行ってきた。特に食堂でのハラルやエスニックメニューの提供は、全国的にも先進的な取組みとして多くの大学生協からの見学やマスコミ取材を受けている。また、気軽に多国籍メニューを利用できる別府の隠れた名所として多くの地元住民も訪れ、大学の地域貢献の一環をなしている。

他方で、立命館生協に対する国際学生の要望や評価は厳しく、とりわけ食事に関わる分野で、「ハラルの新鮮な肉を食べたい」「メニューがマンネリだ」「成分表示が分からない」という声が聞かれる。また、立命館生協主催の食生活相談会においては、相談に応じた栄養士からも「お金がないから食べていない」「カロリーをお菓子里で摂っている」「いつも同じものばかり食べている」「痩せすぎと太りすぎが極端」という国際学生の食生活の実態も明らかになっており、単に食堂で提供するメニューや購買での品揃えの問題にとどまらない食生活そのものが問題となっている<sup>注6)</sup>。

### 3. 立命館大学の「グローバル30」採択と立命館生協<sup>注7)</sup>

立命館大学は2010年5月現在で38カ国1,113人の留学生が在籍している。2009年度にいわゆる「グローバル30」の指定を受け、今後さらに増加する留学生の受け入れやカリキュラム再編の準備を始めている<sup>注8)</sup>。

立命館生協では、BKCキャンパスで学生向けマンションを斡旋し、ほとんど日本語を話せない留学生に対して英語対応のできる職員を配置している。食堂では、5、6年前からBKCキャンパスの食堂でタイカレーなどのエスニックメニューやハラルメニューの提供を開始し、留学生の要望に応える取組みを行なっている。しかし、すべての食堂や購買などの店舗で留学生対応のメニューや商品の品揃え、価格等の2言語表記に取り組んでいるわけではなく、食堂の一部に限定されている。また、中国人留学生を中心とする留学生委員会が組織されているが、新入留学生の歓迎会等の交流活動が中心で、留学生

のリクエストを店舗に反映させたり、日常生活面での支援の取組みが積極的にすすめられているとは言えない。立命館生協は、大学での福利厚生面において独自の責任を有する立場から、これまでのAPUでの取組みの到達点を踏まえて、立命館大学においても留学生が安心して勉学に取り組めるためにできることは多い。今後も、事業活動を通じて留学生生活の向上に貢献することがより一層求められている<sup>注9)</sup>。

### 4. 国際学生の日常生活に関する詳細な実態調査の必要性について

「留学生受け入れ10万人計画」を契機とする留学生の受け入れ増加に伴い、学術的な観点から留学生の日本の大学や社会への適応についての調査や研究、日本学生支援機構をはじめとして様々な大学で留学生へのアンケート調査が行なわれ、経済状況、奨学金、アルバイトや就職、住居、人間関係、授業内容や言葉の問題など広い分野で留学生の実態が明らかにされている。そうした調査を受け、大学入学時のオリエンテーションの充実や民間団体による留学生支援活動が広がりを見せ、留学生生活の困ったことの改善や満足度を向上させる取組みはすすめてられているが、食生活や宗教・文化・習慣に関わって踏み込んだ調査は管見の限りでは見受けられない<sup>注10)</sup>。

一方、全国の大学生協では、毎年、学生生活実態調査<sup>注11)</sup>を実施し、生協に対する学生組合員の評価を踏まえて事業の改善に生かすだけでなく、調査や分析結果を広く世間に公表し、「現代大学生像」への理解を深める取組みを行なってきた<sup>注12)</sup>。しかし、調査票の中で、属性区分で「国籍」や「留学生」が選択肢に含まれず、留学生の生活実態を把握するための調査とはなっていない。APUでも、日本語と英語の二種類の調査票を作成して同調査を行なってきた。しかし、①日本語の調査票での回答の中には日本語基準で入学した国際学生が含まれるが、それらの集計データは国内学生として扱われている、②国際学生のサンプル数が少ない、③宗教や文化による区分の分析ができない、④2008年経済危機以前の調査のために経済状況が大きく変化し、現在の国際学生の実態分析としては適当でないという問題がある。

このように、従来取り組まれてきた調査や研究では、国際学生の生活実態やニーズを十分にとらえ、事業活動に反映させるには不十分である。食堂を初めとする飲食関連部門は生協の基幹事業であると同時に、学生にとっ

でも、最も多くの要望が寄せられる身近な部門である。中でも、学内における食生活の充実、健康面だけでなく、APU 入学後の慣れない生活から生ずるホームシックやストレスを緩和し、日本での勉学研究に集中できる環境づくりにおいて極めて大きな要素となっている。「食の安心」は「学びの安心」となると言える。また、APU で取り組まれているマルチカルチュラルウィーク<sup>注13)</sup>は、学生自身が各国・地域のエスニックメニューを食堂で紹介・出食することでアイデンティティを高め、かつ異文化交流をすすめる重要な取組みとして位置づけられている。さらに、地域住民からの関心も非常に高い。これらの意味から、立命館生協が APU 国際学生の生活を支援し、「学びの安心」を高める取組みをさらにすすめていく上で、国際学生の生活実態、とりわけ食生活の実態とニーズに深く踏み込んだ調査・分析が必要となっている。

### 5. 先行調査から見える APU 国際学生の食生活の概要

2006 年 11 月実施の APU 学生生活実態調査は、上記のような限界があるとはいえ、国際学生の大まかな傾向を見ることができる。ここでは、食生活実態調査を実施するに先立ち、現時点で見ることのできる国際学生の生活実態の概要を見ておく。ただし、AP ハウス<sup>注14)</sup>と市内マンションでは生活環境が大きく異なるが、属性区分がないために区別してみることができない。また、サンプル数も少ないため、回生と国内・国際学生の区分を用いて生活実態を見ていく。なお、国際学生の生活実態をより浮き上がらせるために、国内下宿生を比較対照とした。

#### (1) サンプル数

調査は、2006 年 11 月に実施した。昼食時に生協食堂を利用している学生を対象に調査協力の呼びかけを行ない、その場で調査票を回収または後日提出してもらった。回収したサンプル数は表 1 の通りである。

表 1 2006 年実施学生生活実態調査の回収サンプル数

	国際学生		国内学生	
	人数	割合	人数	割合
1 回生	20	33.3%	116	37.7%
2 回生	11	18.3%	86	27.9%
3 回生	15	25.0%	59	19.2%
4 回生	14	23.3%	47	15.3%
合計	60	100.0%	308	100.0%
男子	19	31.7%	118	38.3%
女子	41	68.3%	190	61.7%
寮生	39	65.0%	35	11.4%
下宿	20	33.3%	232	75.3%
自宅	1	1.7%	41	13.3%

### (2) 経済状況

#### ① 1カ月の収入について（図 1、図 2）

収入構成では、仕送り額は国際 2 回生を除くと国際学生と国内下宿生の間ではあまり差は見られない。奨学金は、国際 1 回生と国内下宿生で比率が高い。

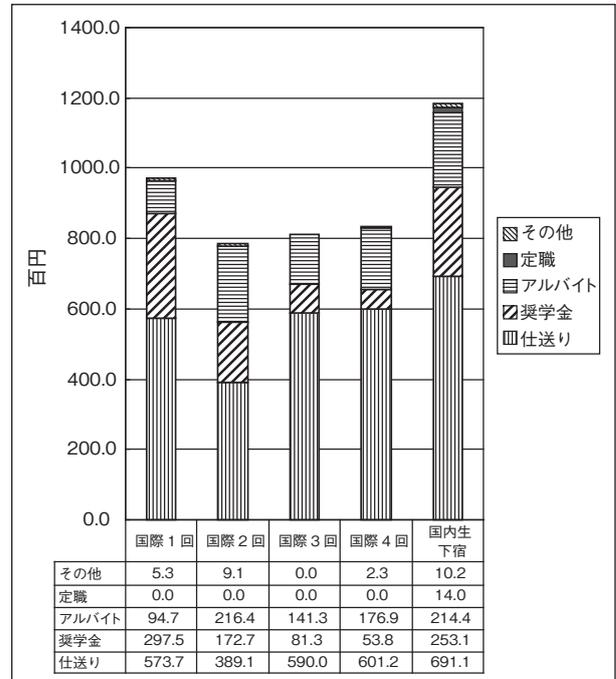


図 1 1カ月の生活費／収入費目別平均

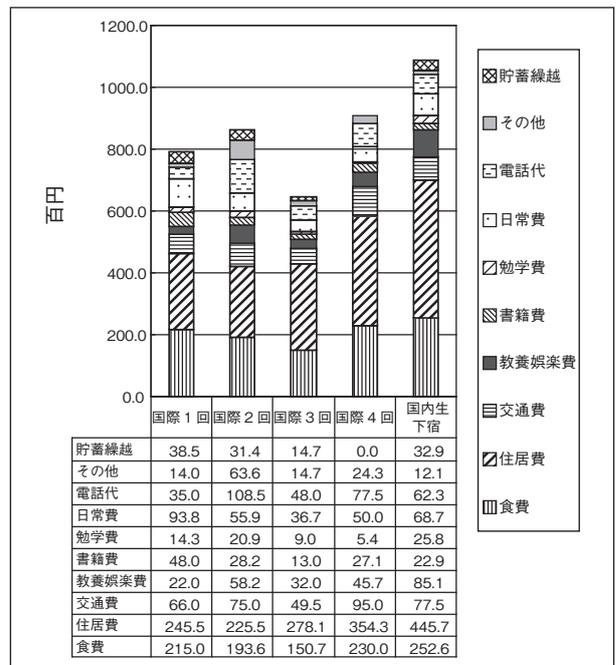


図 2 1カ月の生活費／支出費目別平均

\* 国際学生の場合、サンプルによって大きな収入額や支出額の差があるため、上下に極端に差のあるサンプルは省いている。  
\* 金額は項目ごとの平均値なので、表の収入と支出のバランスは一致しない。

アルバイト収入は、国際1回生がもっとも少ない。

支出構成では、食費は国際3回生を除くとそれほど大きな差は見られないが、国際1回生では衣類やタバコ、日用品等の日常費と書籍代が高く、国際2回生では電話代が高く、国際3回生では住居費が低く、4回生では交通費が高い。

②暮らし向きについて (図3)

現在の暮らし向きについては、APハウスを退寮して市内マンション等で下宿生活となる国際2回生で「大変楽」「楽な方」を合わせると4割を割っており、「苦しい」「大変苦しい」を合わせると4分の1を占めている。一方、国際1, 3, 4回生では過半数が「大変楽」「楽な方」と感じ、「苦しい」「大変苦しい」はほとんど見られない。

国内学生については、国際2回生ほどではないが、

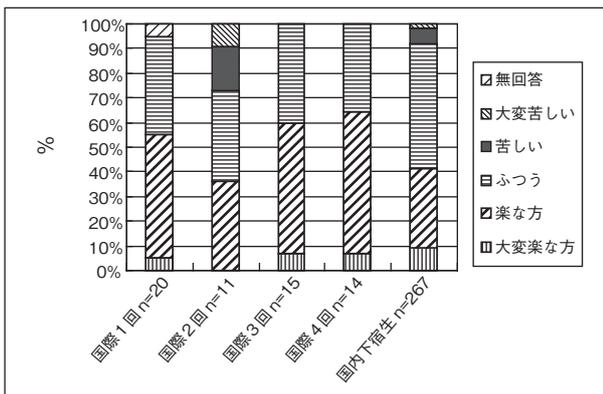


図3 現在の暮らし向き

国内経済状況を反映して、暮らし向きは比較的苦しいと感じている。

③日常生活で気になっていること (図4)

日常生活で気になっていることは、「生活費やお金」「授業やレポート等勉強」「就職」で高く、国際2回生で「生活費やお金」「授業やレポート等勉強」で非常に高くなっている。国際3回生では「就職」が最も気になっている。

④健康面で気になること (図5、図6)

サンプル数が少ないとはいえ、国際2回生のすべての学生が健康面で気になることが「ある」と回答し、他の区分でも約半数が「ある」と回答している。気になることとしては、「肩がこる」「めまいがする」「太りすぎ」など身体的な症状や、「やる気がない、だるい」というメンタルな症状が多くなっているが、このことから、すぐに健康面で重大な問題が

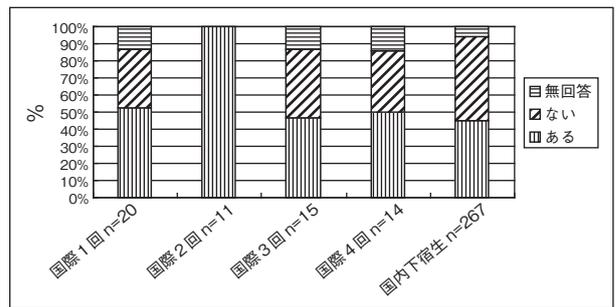


図5 健康面で気になることがある

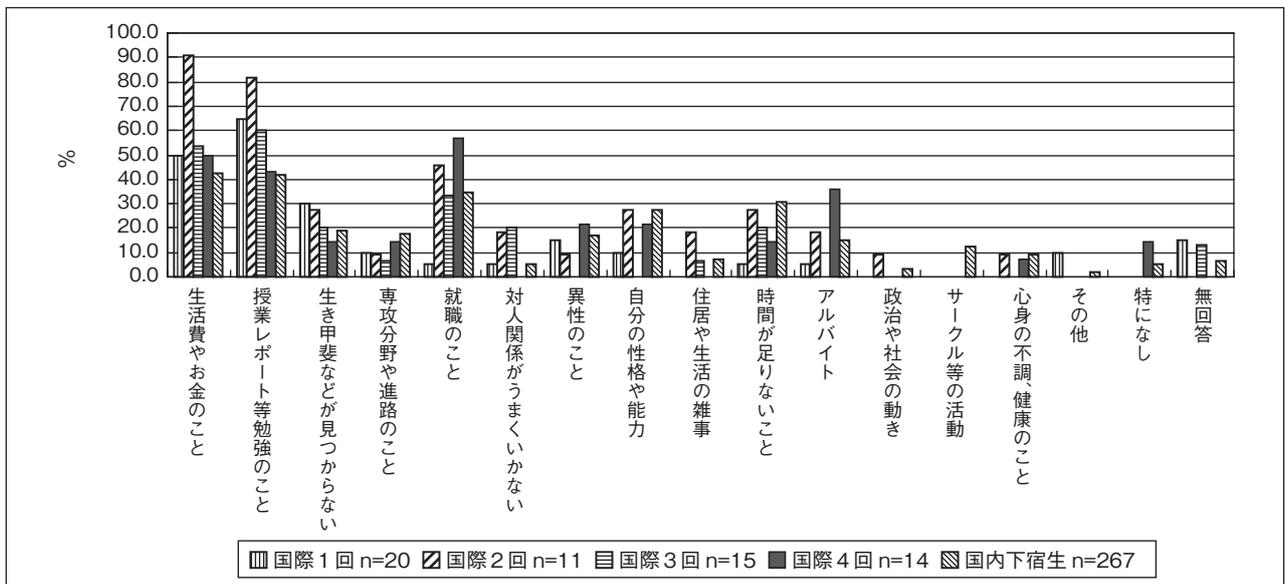


図4 日常生活で気になっていること (複数回答)

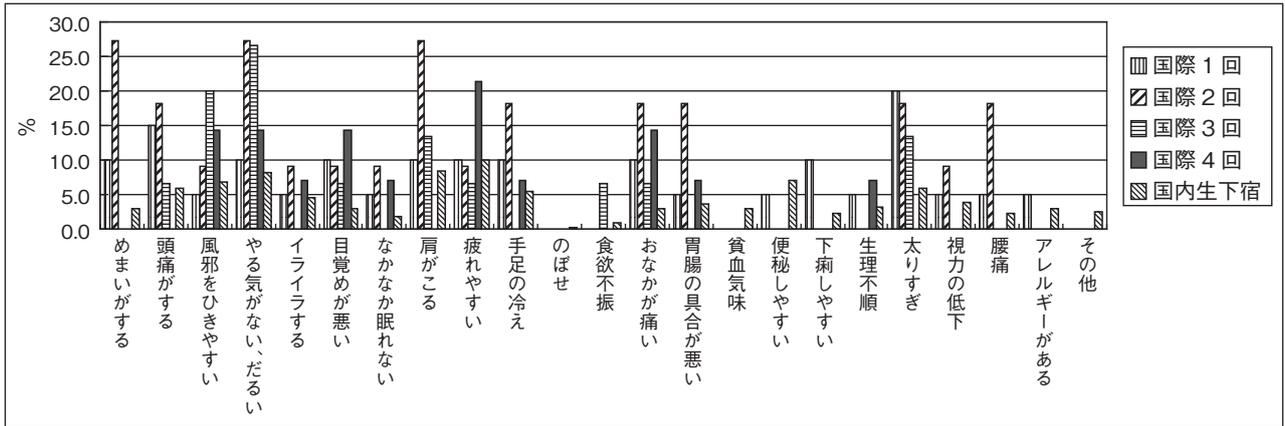


図6 健康面で気になること（3つ選択）

あるとはまでは言えない。

⑤ 食事の摂取率と立命館生協利用率（図8～図13）

朝食について、国際1、3回生で過半数が摂っている。朝食を摂っている人の多くは自炊をし、生協（食堂またはショップ）利用率は10%に満たない。

朝食兼昼食について、朝食とは逆に国際2、4回生の過半数が摂っているが、その際には生協での利用が多い。

昼食について、どの区分でも摂取率は5割を超え、1日のうちで最も摂取率が高い。生協利用率も3割を超える。

中間食について、国際2、3回生で3割程度が摂

っており、朝食兼用食と同様の傾向が見られ、1日の食事時間のズレが生じていると考えられる。

夕食について、どの区分も過半数が摂っており、自炊率も最も高い。生協利用率では、国際1、2回生で15%を超えている。

深夜食については、国際4回生で摂取率は5割を

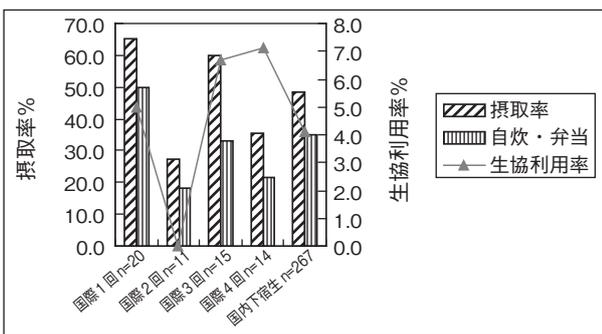


図7 朝食摂取率と生協利用率

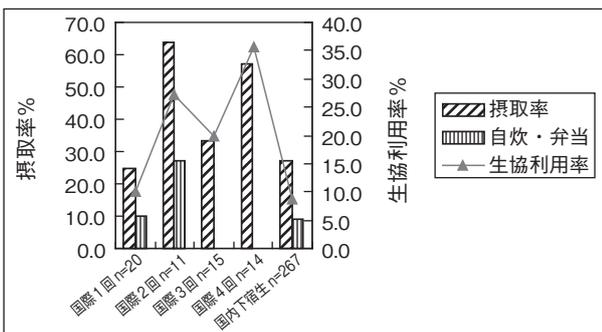


図8 朝食兼昼食摂取率と生協利用率

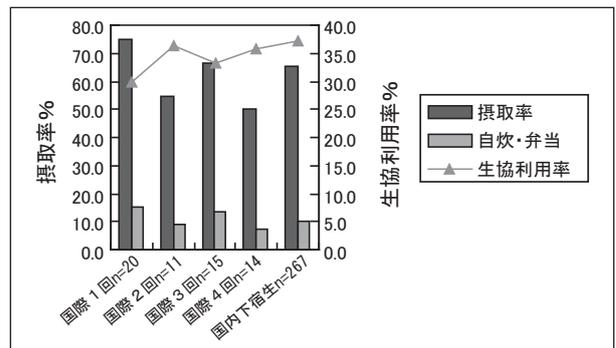


図9 昼食摂取率と生協利用率

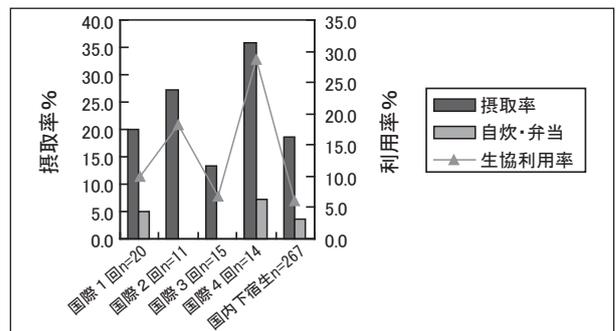


図10 中間食摂取率と生協利用率

超え、他の区分でも2～3割が深夜食を摂っている。

⑥ 食生活で気をつけていること（図13）

食生活で気をつけていることでは、国際学生、国内学生ともに「栄養バランス」が最も多く、「野菜を多く摂る」「食べ過ぎに注意する」が次いで多い。

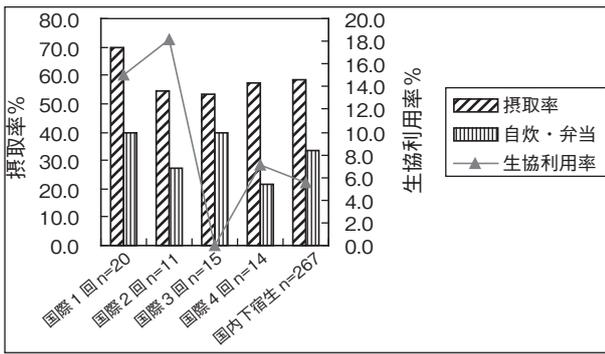


図 11 夕食摂取率と生協利用率

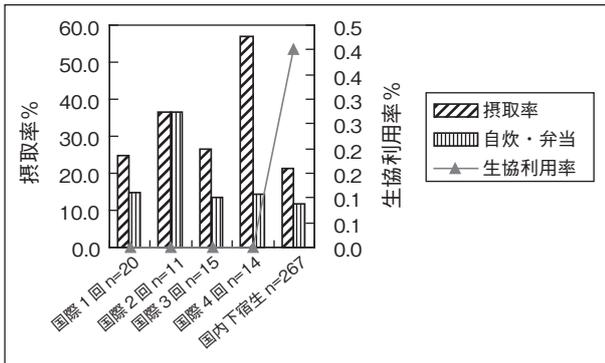


図 12 深夜食摂取率と生協利用率

⑦ 2006 年学生生活実態調査から見えてくる国際学生の姿  
国際学生のサンプル数が少ないとはいえ、以下の  
ような食生活の姿が浮かび上がる。

- i) 国際学生は、国内学生と比べて経済面では厳しいものの、暮らし向きについては比較的楽と考えている。
- ii) 国際学生は、国内学生と比べて授業やレポート等勉強で気になっている比率が高いが、これは留學目的が明確であることや語学力に不安を感じてい

るためと考えられる。

- iii) 国際学生は、国内学生と比べて基本食事（朝食、昼食、夕食）を摂る割合が高く、食事での生協利用率が高く、栄養バランスを心掛けている。
- iv) 国際学生は、国内学生と比べて健康面で気になることが多く、肩こりやめまいなど身体的な面以外に、やる気が出ないなどメンタルな面で気になることが多い。

## II. 研究の目的

研究の目的は、以下の 2 点である。

1. 国際学生の食生活実態調査を通じて、食生活の特徴や問題、要望を明らかにする。  
経済状況、生協や生協以外の利用、食文化、健康などを調査分析することで、これまで断片的にしか捉えられなかった国際学生の食生活の実態を明らかにする。

2. 立命館生協の商品活動や提案活動の課題を明らかにする。

明らかになった食生活の実態を受け、様々な宗教や文化に対応した食事提供の機会の拡大と、バランスのとれた食事や体調維持のための提案活動に分けて、生協らしい国際学生の生活支援事業の課題を明らかにする。

## III. 研究の方法

本研究では、国際学生を対象とするアンケート調査を通じて、食生活を中心とする生活実態を明らかにする。

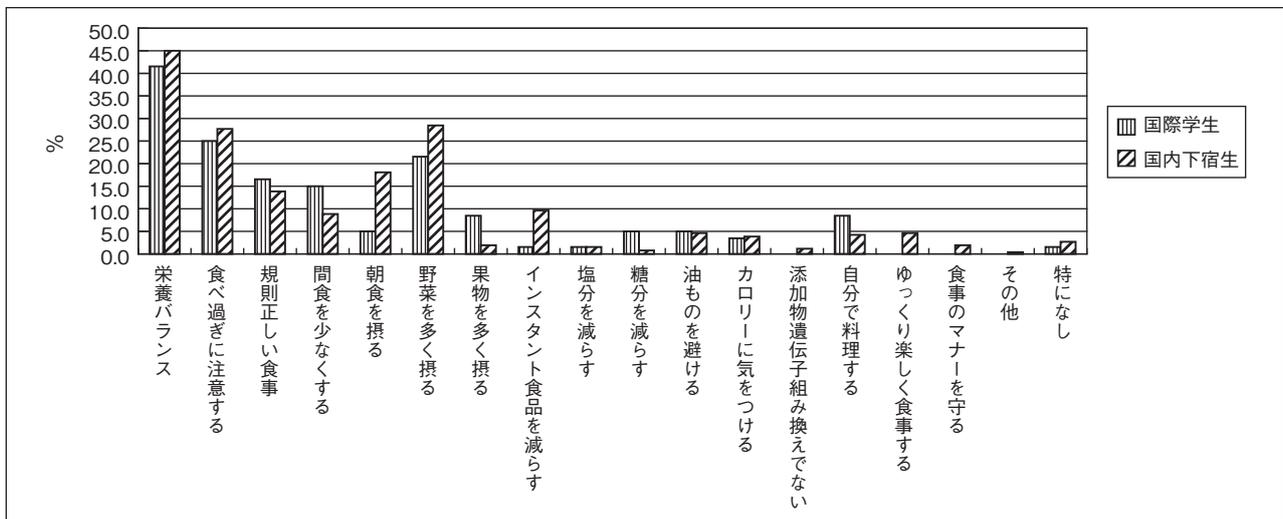


図 13 食生活で気をつけていること（2つ選択）

## 1 調査テーマ

国際学生の生活（主に食生活）と生協利用、生協への要望についての実態調査。

## 2 調査対象

- (1) APハウス居住の国内学生と国際学生(対象者数: 約1,200名)。
- (2) APハウス居住以外の国際学生と国内学生(対象者数: 約400名)。

調査票の回収については、国籍や宗教・文化に極度の偏りがないように配慮した。

## 3 調査方法

アンケート調査

## 4 実施時期

7月下旬～8月上旬

## 5 アンケート配布、回収方法

- (1) APハウス居住者には、全員の個人ポストに投函。回答後、生協ショップに提出してもらった。また、追加的にハウス内でアンケートを配布、回収を行なった。
- (2) APハウス居住者以外については、7月22日および23日に、昼食時に生協食堂を利用している際に調査協力の呼びかけを行ない、その場で調査票を回収または後日提出してもらった。
- (3) 回答していただいた学生には、生協利用券を粗品として進呈した。

## 6 集計分析方法

国際学生の生活実態を明らかにすることを目的としているが、国際学生の特徴をより明確にするために、必要な限りにおいて国内学生との比較分析を行なう。

## 7 調査項目

- (1) 基本属性: 回生、国籍、宗教、食文化、住居形態、居住者。
- (2) 経済生活: 1カ月の収入・支出構成、暮らし向き。
- (3) 大学生活: 重点、満足度、日常生活で悩んでいること。
- (4) 食生活: 食事の摂取状況、食生活上の悩み、食料品の買い物行動、気をつけていること・でき

ていないこと、栄養サプリメント等の利用、食習慣。

- (5) 健康: 健康状態、入通院、薬局・ヘルスクリニックの利用、飲酒、喫煙。
- (6) 生協食堂への評価。
- (7) 自由記入。

## VI. 調査・分析

### 1. APU 学生の食生活に関する実態調査の集計結果<sup>注15)</sup>

#### (1) サンプルについて (図14、図15、表2)

アンケート配布1,500通に対して、616通の回答(回収率41.1%)が得られた。その内訳は、国際学生<sup>注16)</sup>381名、国内学生231名である。2010年5月現在の学生在籍数6,231名(うち国際学生2,921名、国内学生3,310名)に対する回答者数の率は9.9%である。

居住形態別ではAPハウスが46.2%、別府市内マンションが43.9%で、ほぼ同数の回答となっている。

国籍別では、日本が最も多く36.7%を占め、次いで中国15.7%、韓国10.2%、タイ9.1%、インドネシア8.1%が続き、不明は7名(1.1%)あった。国際学生の上位の国籍別シェアは実際のAPU在籍者の順位とほぼ同じだが、アメリカのサンプル数が多くなっている。

以下、分析をすすめるにあたり、国際学生・国内学生、回生、男女、APハウス・市内マンション在住の区分を基本的に用いる。国内下宿生という場合には、国内学生のAPハウス居住者と市内マンション居住者を合わせた区分として、国際学生と比較の際に用いることとする。

図14 回生、男女、国際・国内別サンプル数 n=602

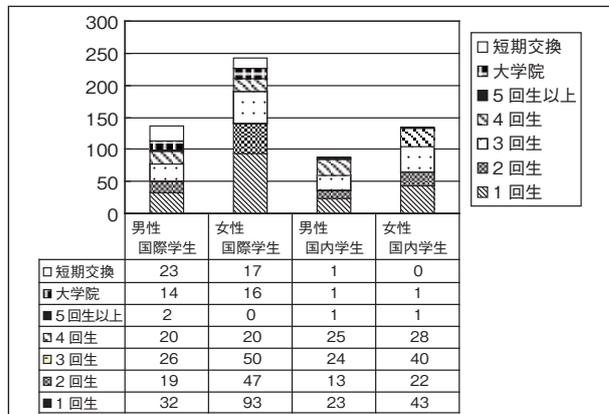


表2 国籍別上位回答数 n=616

国籍	回答数	%
日本	226	36.7%
中国	97	15.7%
韓国	63	10.2%
タイ	56	9.1%
インドネシア	50	8.1%
アメリカ	24	3.9%
ベトナム	23	3.7%
台湾	11	1.8%
ミャンマー	9	1.5%
マレーシア	6	1.0%

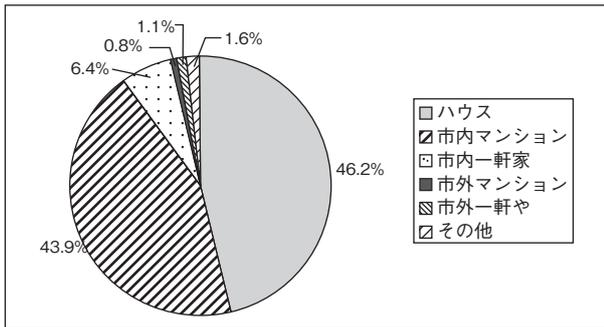


図15: 住居形態別サンプル n=613

(2) 経済状況について (図16、図17)

①国際学生の回生別収入・支出構造 (平均値)

国際2回生は、収入が最も多い1回生と比べて約9,000円の収入差があり、収入に占める仕送りと奨学金の減少をアルバイト収入で補填できていない。支出については、APハウスを退寮後、友人とマンションでルームシェアすることで家賃を節約することができるが、ほとんど貯金や繰越ができていない。国際2回生は、収入と支出の両方について、他の回生と比較して最も少なく、経済的には最も厳しいと言える。

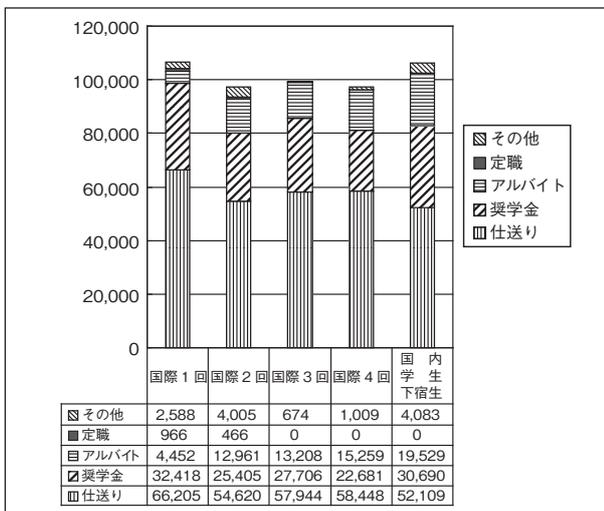


図16 1カ月の収入構成 n=502

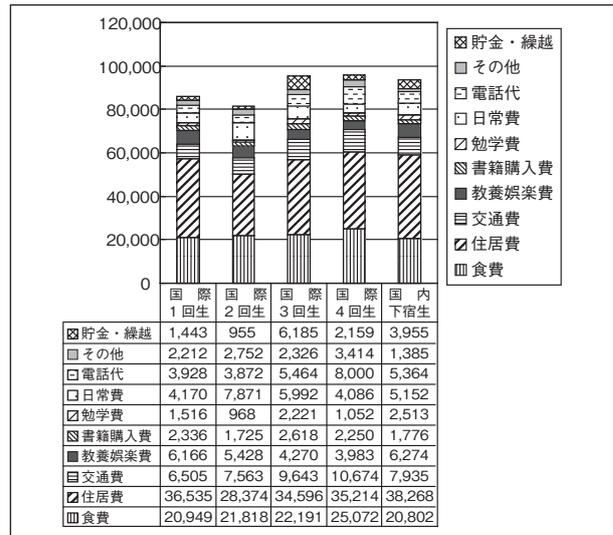


図17 1カ月の支出構成 n=502

②暮らし向きについての意識 (図18、図19)

現在の暮らし向きについて、国際学生は、国内学生と比べると「楽」と感じている。ただ、2008年経済危機以前の2006年調査(表4)と比較すると、「楽な方」「大変楽な方」の比率はあまり変化はないが、「苦しい方」「大変苦しい方」が増えて1~2割程度を占めるようになってきている。今後の暮らし向きについても、国際学生の方が楽観的な見通しを持っている。

国際学生を回生別に見た場合、収入・支出構造でも明らかのように、APハウスを退寮した2回生は現在の暮らし向きを厳しく見ているが、今後の見通しについては他の回生とほとんど差は見られない。

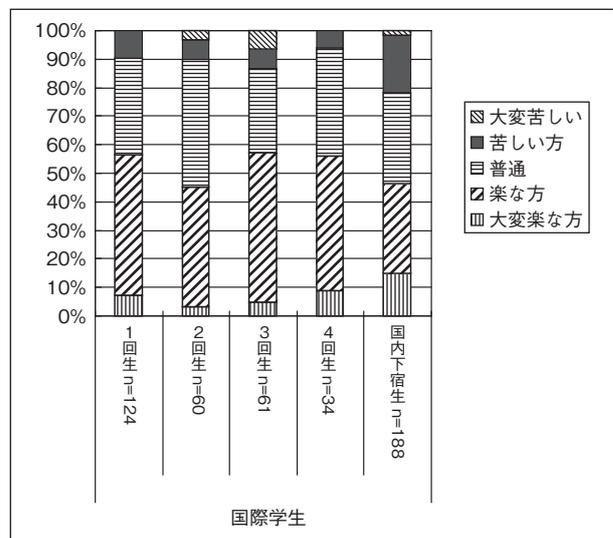


図18 現在の暮らし向き n=467

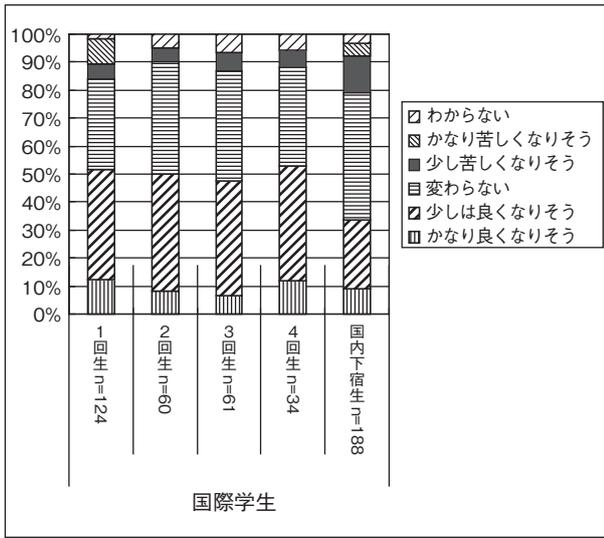


図19 これからの暮らし向き n=467

③節約した支出費目、増やしたい支出費目（図20、図21、図22、図23）

国内学生は、「外食費」を重点的に減らしたいと考えているのに対して、国際学生は、「外食費」「交通費」「電話代」「嗜好品費」と幅広く節約したいと考えている。また、APハウスに住んでいる国際学生は、複数でルームシェアしている市内マンション在住者よりも家賃が割高なため、「住居費」を減らしたいと考えていることが伺える。

増やしたい支出費目については、国際学生は、「貯金」「教養娯楽費」「外食費」「書籍代」「勉強費」と幅広く増やしたいと考えているのに対して、国内学生は「貯金」を最も増やしたいと考えている。国際学生と国内学生との間では、消費志向に大きな差が見られる。

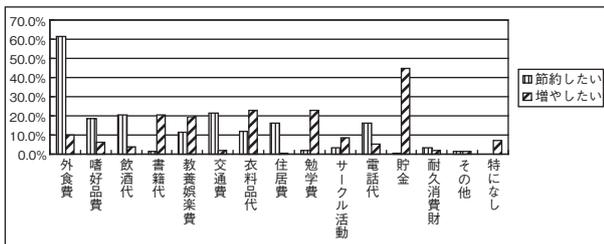


図20 国内学生(APハウスの)の支出費目について n=150

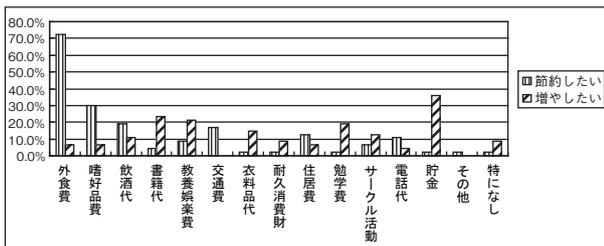


図21 国内学生(市内マンション)の支出費目について n=47

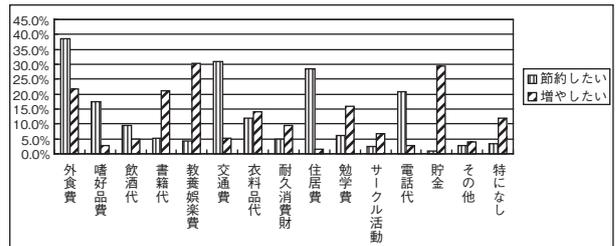


図22 国際学生(APハウスの)の支出費目について n=208

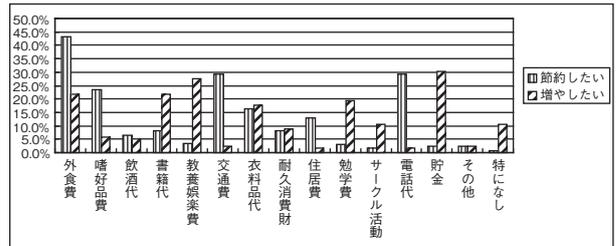


図23 国際学生(市内マンション)の支出費目について n=171

(3) 大学生生活について

①大学生生活の重点と充実度（図24、図25、図26）

どの区分においても「充実している」「まあ充実している」と考える学生が9割前後を占め、APUでの大学生生活の充実度は非常に高くなっている。ただ、国際学生について「充実している」と答えているのは、国内学生と比べて比率で見ると半分に留まり、他方で「充実していない」「あまり充実していない」が国内学生よりも高い比率になっている。今回の調査からは理由は明らかではないが、国際学生は留学の目的意識が明確になっていると考えられるので、厳しく評価している可能性もある。

大学生生活の重点についてみると、国際学生は「勉強研究」に最も大学生生活の重点を置き、次いで「友人などの豊かな人間関係」が多いのに対して、逆に国内学生は「友人などの豊かな人間関係」に最も重

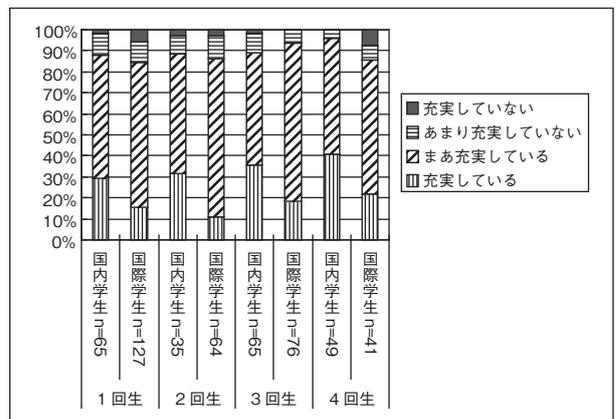


図24 大学生生活の充実度

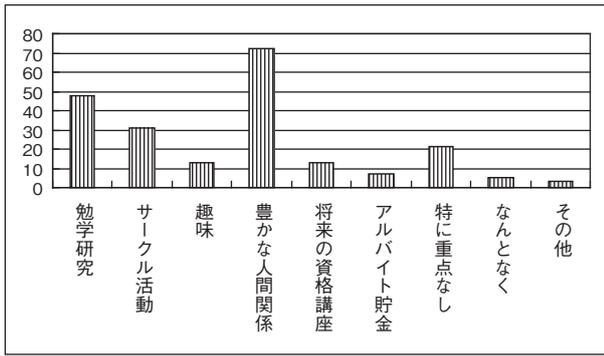


図 25 国内学生の大学生生活の重点 n=225

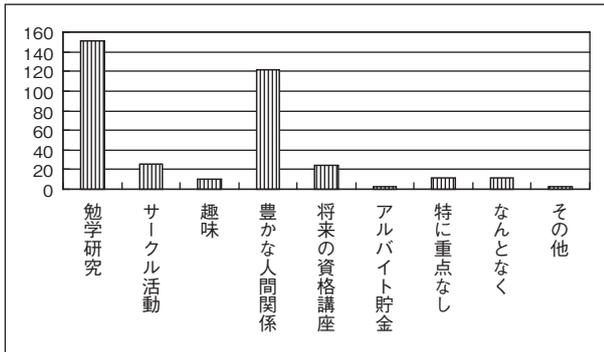


図 26 国際学生の大学生生活の重点 n=382

点を置き、次いで「勉学研究」「サークル活動」が多い。

②国際学生が日常生活で悩んでいること（図 27）

悩みとして、「生活費などお金」「授業やレポート等勉強上」が最も多く、それらは低回生ほど悩みの度合いが強い。また、「就職」「専攻分野や進路」は3回生が最も多い。こうした傾向は、2006年時の実態調査（表5）と同様の傾向である。

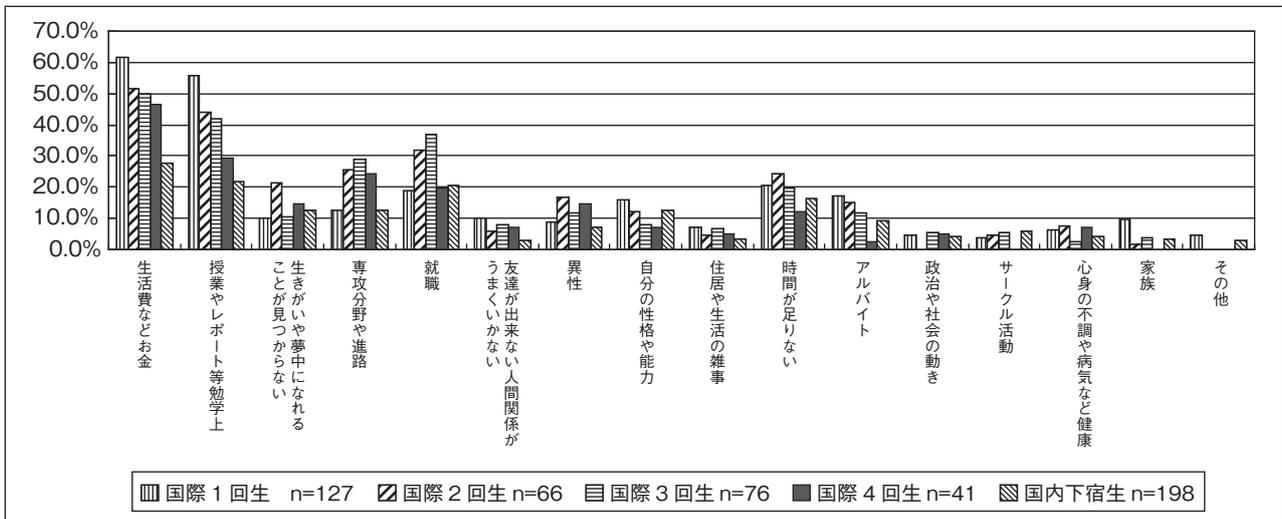


図 27 日常生活で悩んでいること（複数選択）

(4) 食生活と健康について

①食事の摂取率（表3、図28）

ほとんど全ての食事において、国際学生の方が食事をとる比率が高い。基本食事（朝食、昼食、夕食）の中では、朝食の摂取率が最も低い、APハウスの国際学生は65.1%と他と比べて10ポイント以上も高い。

表 3 各食事の摂取率

	朝食	朝昼兼用	昼食	中間食	夕食	深夜食
食事時間帯	～9:00	9:00～11:00	11:00～14:00	14:00～17:00	17:00～21:00	21:00～
APハウス						
国際生 n=218	<b>65.1%</b>	39.9%	<b>86.7%</b>	45.9%	<b>84.9%</b>	<b>48.2%</b>
国内生 n=61	55.7%	41.0%	68.9%	41.0%	80.3%	42.6%
市内マンション						
国際生 n=135	52.6%	<b>46.7%</b>	80.0%	<b>49.6%</b>	80.7%	41.5%
国内生 n=132	53.0%	43.9%	73.5%	34.1%	77.3%	37.9%

朝食をとった学生のその後の食事摂取の状況を見ると、朝食をとらない学生と比較して、昼食や夕食の摂取率が高くなっている。このことは、朝食の摂取が「朝食→昼食→夕食」という一日の食事のリズムを整える役割を果たしていると言える。

また、居住形態に関係なく、国内学生と比べて、国際学生の方が食事のリズムが比較的取れていることを示している。逆に、朝食をとらない国内学生は、「朝昼兼用

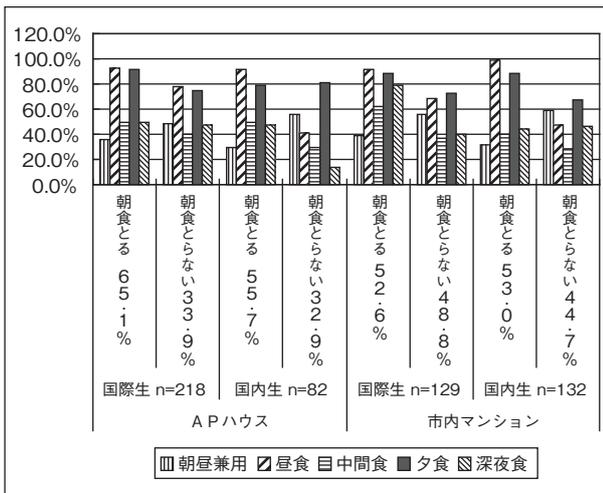


図 28 朝食をとる場合ととらない場合のその後の食事摂取

→中間食」という時間差のリズムがあるわけではなく、そもそも食事をとらない傾向があり、必要な栄養を食事でとる習慣ができていないと言える。

②国際学生の主な食事の摂取場所<sup>注17)</sup>

国際学生の各食事について、主な摂取場所を見ていく。  
 <朝食～9:00> (図 29)

APハウス居住者の8割がハウス内とっている。市内マンション居住者でも6割以上が自宅とっているが、生協での朝食利用は1割程度である。現在、生協食堂の朝食特別メニューでの営業時間は平日8:15～10:00で、約150～180人程度の利用があるが、この数年で利用客数は減少傾向にある。

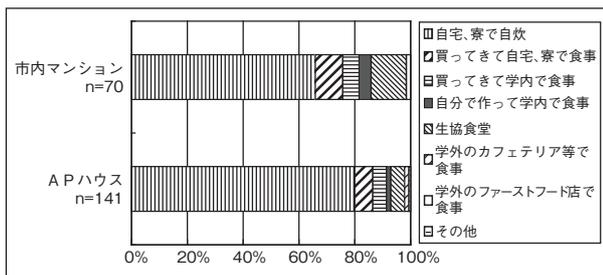


図 29 国際学生の朝食の摂取の有無と場所

<朝食兼用食 9:00～11:00> (図 30)

APハウス居住者ではハウス内とる割合が一番多いが、市内マンション居住者のほぼ4割が自分で作ってきて学内で食べている。実際、節約手段として、自分でご飯を炊いて持ってきて、おかずだけを生協食堂で購入して食べる学生も多く見られる。また、APハウス居住者の約2割が「買ってきて学内で

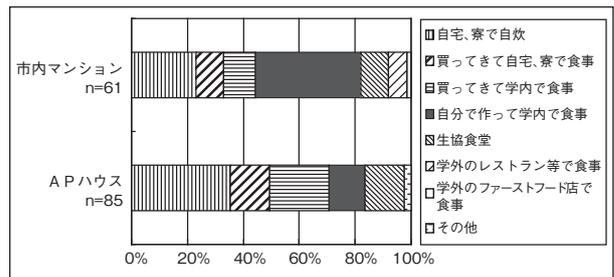


図 30 国際学生の朝食兼用食の摂取と場所

食事」と回答しているが、生協ショップでパンや弁当などを購入している場合も含まれると思われる。

<昼食 11:00～14:00> (図 31)

昼食は、市内マンション、APハウスともに生協食堂が最も多いが、APハウス居住者はAPハウスに帰って自炊している学生も3割を超える。2008年6月に生協が行なった学内人口動態調査でも、昼休みや空きコマの時間にAPハウスを出入りする人数が多く見られたことと一致する。

また、2006年調査(表10)では生協利用率が35%程度だったが、食堂利用率はAPハウスでも4割、市内マンションでも6割に達している。その分、ショップでのパン弁当等の利用減少につながっていると思われる。

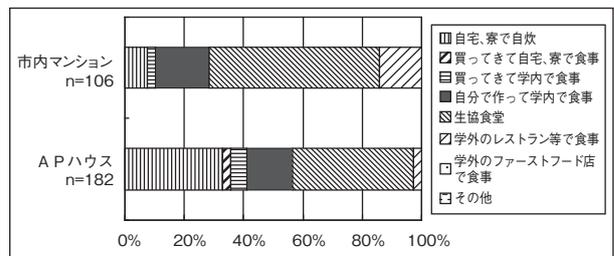


図 31 国際学生の昼食摂取と場所

<中間食 14:00～17:00> (図 32)

昼食同様に、生協食堂の利用が最も多く4割近くを占めるが、次いで生協ショップで購入して食べている層が2割程度いる。生協ショップを利用する来店者数データによれば、1時間あたりの来店者数で見れば12:00～13:00が最も多いが、今回の調査の食事時間帯区分で見れば14:00～17:00の時間帯の来店者数が最も多く、利用実態と一致している。

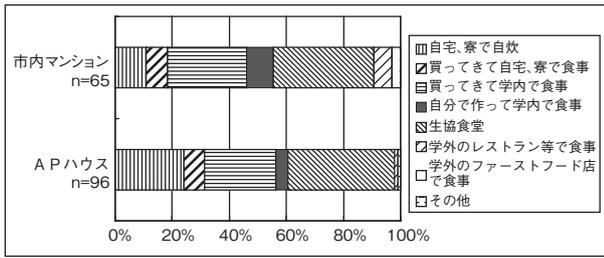


図 32 国際学生の間食摂取と場所

<夕食 17:00 ~ 21:00 > (図 33)

市内マンション、APハウスともに自宅や寮でとる割合が過半数を占めるが、市内マンション居住者で、学外のレストラン等で食べる割合が2割近くを占める。元々自炊率が高いとはいえ、食堂利用率は、2006年（表12）にはAPハウスで15%程度の利用があったが、今回では1割程度にやや減少している。

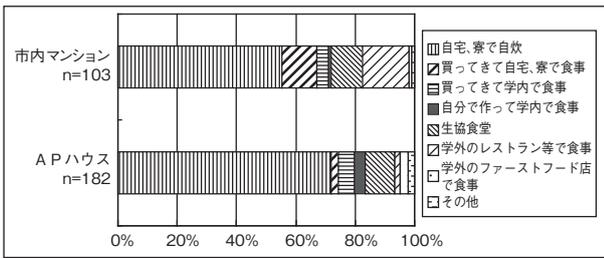


図 33 国際学生の夕食摂取と場所

<深夜食 21:00 ~ > (図 34)

夕食と同様の傾向が見られるが、APハウスに日替わりで出店しているケバブや焼き鳥などの屋台と思われる「学外のファーストフード」の利用が多いのが特徴的と言える。

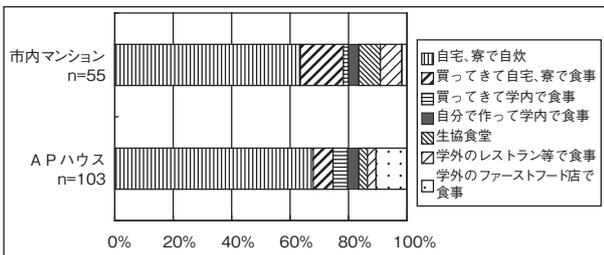


図 34 国際学生の深夜食の摂取と場所

③生協以外の買物の頻度と店舗 (図 35、図 36)

生協以外の食品の買物頻度については、APハウスで頻度が高いのは、日替わりでAPハウス前での野菜、パン、焼き鳥、ケバブ、米などの出張販売を利用する機会が多いと考えられる。

買物先については、市内に多くの支店を持つ総合

スーパーであり、また、APハウスから土・日・祝日専用の割引バス回数券を利用できるA店がどの階層でも利用率が高い。市内マンション居住者では、24時間営業のB店や、食品も取り扱っているドラッグストアのチェーン店をよく利用している。

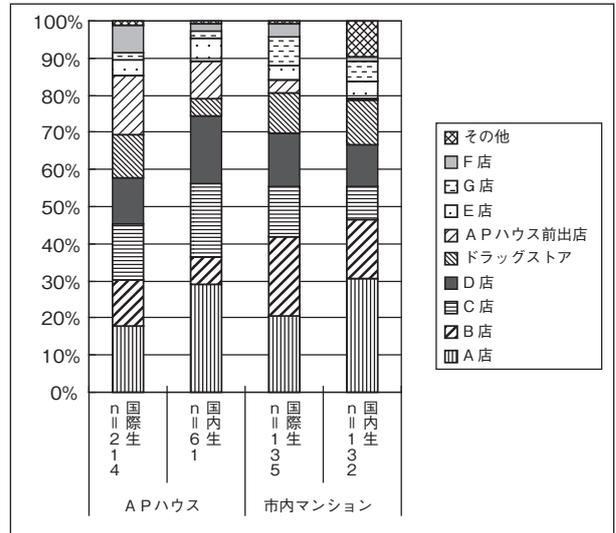


図 35 生協以外の食品の買物先 (2つ選択)

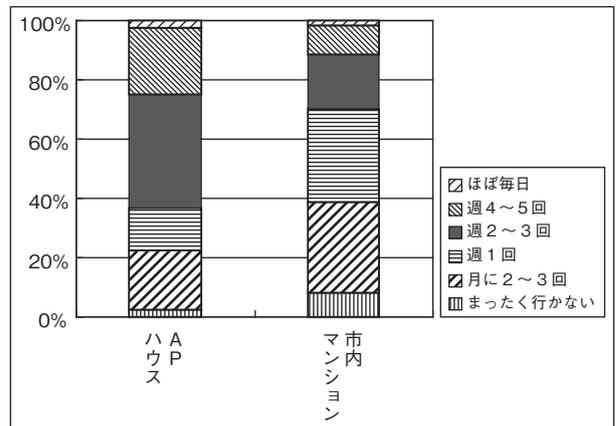


図 36 生協以外の食品の買物頻度 n=552

買物先を選ぶ理由 (図 37) では、ほとんどの店舗で「安い」「近い」を上位に選んでいるが、APハウスの国際学生では、「安い」に次いで「交通手段の利便性」を理由に挙げている。同じAPハウスでも国内学生の場合には、バイクを所有している場合が多いため、交通手段は選択理由としてはあまり優先されないと考えられる。

		第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	第6位	第7位	第8位	第9位
		A店	B店	C店	D店	ドラッグストア	APハウス前出店	E店	F店	G店
APハウス	国際生 n=214	安い40 交通手段32	安い37 交通手段27	安い44 交通手段38	安い41 交通手段26	安い41 交通手段29	安い50 交通手段45	安い17 交通手段7	近い25 交通手段21	交通手段5 近い4
	国内生 n=61	安い18 近い13	安い4 豊富4	近い10 交通手段9 食品以外もある9	安い32 新鮮8	安い4 豊富3	近い6 安い5	安い4 近い2	近い1 新鮮1	近い2 安い1
市内マンション	国際生 n=135	近い32 安い22	安い36 近い26	近い18 安い18	近い20 安い16	安い17 近い14	安い5 近い4	安い6 豊富4	安い6 新鮮4	近い7 安い6
	国内生 n=132	近い51 安い33	近い26 安い19	近い13 安い10	安い18 近い14	近い19 近い18	近い1	安い8 近い7	近い2 安い1	近い9 安い3

図 37 食品の買物先を選択する理由（3つ選択）

\*表中の数字は、理由に挙げられた人数。

④国際学生の食生活で注意していること、注意してもできていないこと（図 38、図 39）

国際学生が食生活で注意している点について、「栄養バランスをとる」「食べ過ぎに注意」「規則正しい生活」「間食を少なくする」「朝食をとる」「野菜をとる」「果物を多くとる」を上げて関心が高いにもかかわらず、十分に注意できているとは言えないと回答している。

逆に、「カロリーのとりにすぎに注意」「自炊すること」「添加物や遺伝子組み換え食品をとらない」「油ものを減らす」「糖分を減らす」「インスタント食品を減らす」ことへの関心度は低い。

注意してもできない理由として、「お金がない」「時間がない」「朝起きられない」「面倒」「食の知識がない」が多い。経済的・時間的な理由ははともかく、食の知識や簡単に作れるメニューの提案や食堂での食べ方提案など、生協が食生活相談や料理教室などを通じて提案し、食生活の改善に結びつけられる余地があると考えられる。

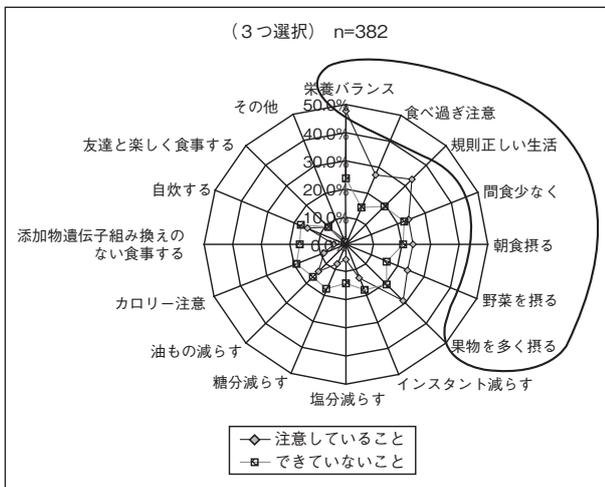


図 38 国際学生の食生活で注意していること、できていないこと

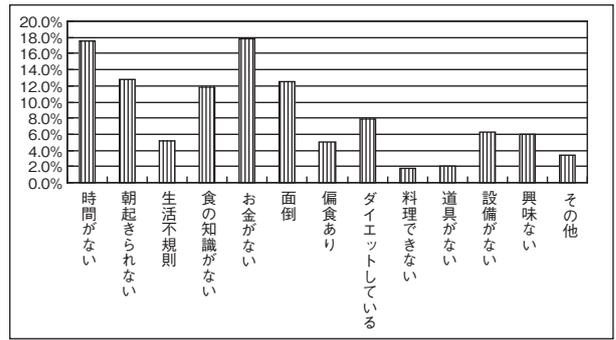


図 39 できていない理由（3つ選択） n=382

⑤健康状態の不調（図 40、図 41）

健康状態の不調について、ほとんどの階層で過半数の女子学生が「感じる」と回答し、男性よりも何らかの不調を訴えている比率が高い。症状としては「便秘しやすい」「目覚めが悪い」「疲れやすい」「眠れない」「めまい」「太りすぎ」が多く、ほとんどの場合、女性の場合が男性よりも不調を感じていると言える。ただし、それぞれの症状を訴えている比率は多くても2割程度であるので、重大な健康問題があるとはまでは言えない。

先の食事の摂取率の考察から、朝食をとることで

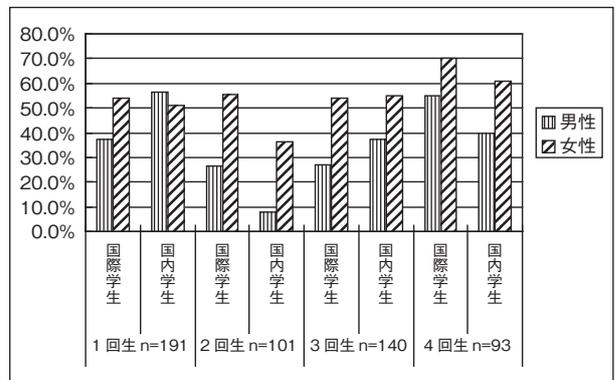


図 40 健康状態に不調を感じる

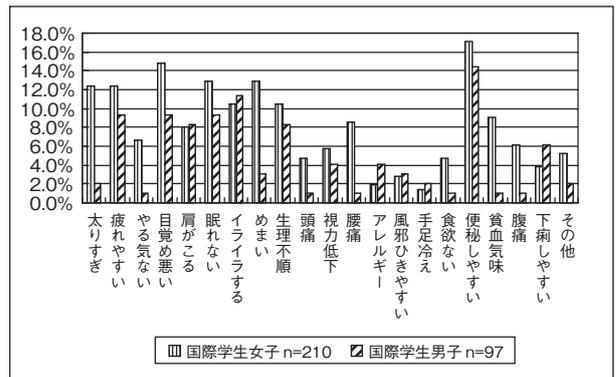


図 41 国際学生の健康不調（3つ選択）

1日の食事のリズムが得られるという結果が明らかになったが、朝食摂取と健康状態の関係で見れば、今回の調査結果からは相関が見られなかった。ただ、国内・国外、居住場所を問わず、4割以上の学生が健康状態に不調があると回答している。

(5) 生協食堂についての評価

国内学生 (図 42) からは、半数以上が「食生活アドバイスがある」「栄養バランスがとりやすい」「環境にやさしい」の項目で不満が強い。また、「価格が安い」「学生の声がかさされている」「好みのメニューがある」「営業時間がマッチしている」についても、4割以上が不満を感じている。

一方、「すぐ食べられる」「店内が明るく清潔」では8割以上が高く評価している。

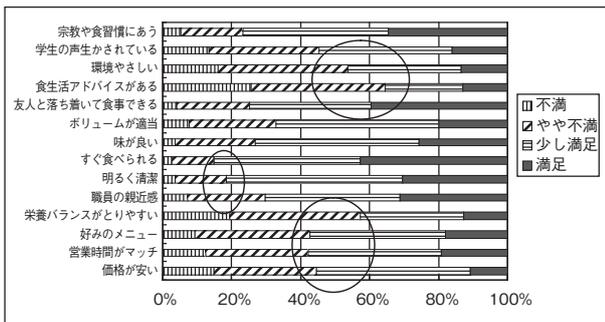


図 42 国内学生の生協食堂についての評価 n=225

国際学生全体 (図 43) では、国内学生と比べると概ね評価は高いが、「栄養バランスがとりやすい」「好みのメニューがある」「営業時間がマッチしている」「価格が安い」で不満に感じている割合が高い。

逆に、国内学生で不満の強かった「食生活アドバイスがある」「環境にやさしい」「学生の声がかさされている」については満足度が高くなっており、国際学生と国内学生との間で、生協食堂に求めるものに差が見られる。

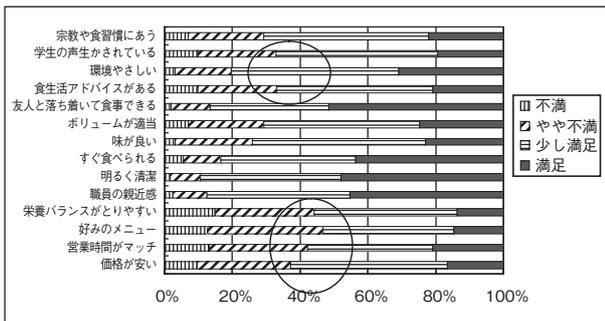


図 43 国際学生の生協食堂についての評価 n=382

ムスリム学生 (図 44) の評価では、「学生の声がかさされている」で最も不満が強く、これまでハラルメニューのさらなる充実を求める声が出されてきたが、十分に応えられていないことへの不満が表れている。次いで、「好みのメニューがある」「価格が安い」「ボリュームが適当」「営業時間がマッチしている」「宗教や食習慣に合う」の項目で不満が多い。ちなみに、今回のムスリム学生のサンプル数 29 名のうち 20 名がインドネシア出身であった。

また、食堂メニューやショップで販売している食品類について、ムスリム学生が安心して食べられるように原材料名を分かりやすく表記してほしいという声もあった。

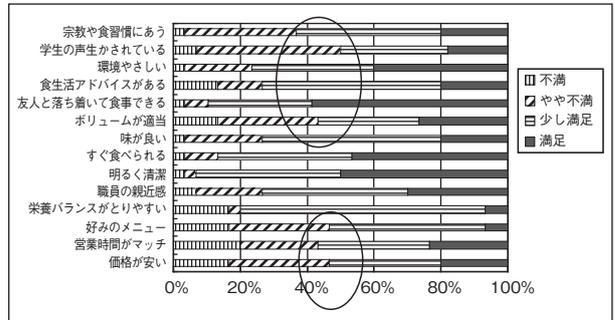


図 44 ムスリム学生の生協食堂についての評価 n=30

ベジタリアン学生 (図 45) の評価では、「栄養バランスがとりやすい」「食生活アドバイスがある」「営業時間がマッチしている」で過半数が不満に感じ、「好みのメニューがある」「環境にやさしい」「価格が安い」「学生の声がかさされている」の項目でも不満が強い。

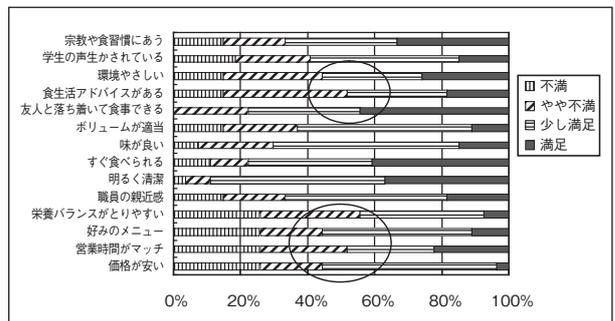


図 45 ベジタリアン学生の生協食堂についての評価 n=27

なお、ベジタリアン学生のサンプル数は 27 名と少ないが、意外にも、そのうち 12 名が国内学生であった。

(6) 自由記入について

ほとんどの回答が食堂に関するもので占められていた。特に、①メニューの価格が高い、②メニューがマン

ネリで変化がほしい、③野菜やフルーツが少ない、④油ものが多すぎる、という不満が多かった。

価格に関しては、国際学生については日本の物価高についての不満が強いと思われる。国内学生も厳しい経済状況を反映しての値下げの要望が強かった。また、国内学生、国際学生を問わず、サラダを食べたいが「1g = 1円」という価格への不満が強い。

メニューの変化や種類に関しては、唐揚げの人氣が高いこともあって実態としては揚げ物が多いが、「4年間唐揚げを食べてきた」という声に象徴されるように、利用者からすれば毎日同じメニューが出されていると感じている。また、栄養バランスを考えたメニューがほしいという声も多く、メインとサブ（小鉢のおかず）の組み合わせを自分で考えて選ぶよりも、一度に栄養がとれるセットメニューを求める声もあった。ただ、小鉢のおかずに関して、国際学生にとっては、1品ずつ複数のおかずを取るという食習慣に慣れていないことや、表示が不十分なために利用されにくいという実態もあり、提供の際の工夫が必要である。

野菜やフルーツに関しては、野菜を使った料理、新鮮なサラダやフルーツを食べたいという声は国内学生、国際学生を問わず多かった。学生自身が食生活で気をつけていることとして、「栄養バランス」「野菜・フルーツを多くとること」を挙げる一方で、十分にできていないと感じており、強く対応が求められている部分である。

ムスリム学生の声では、やはりハラールメニューの充実が最も求められている。別府市内でハラールメニューを提供する飲食店が限られており、生協食堂が貴重な食事場所になっている。それだけに要求の度合いが強くなっていると思われる。

ベジタリアン学生からは、ベジタリアンが利用できるメニューの充実が求められている。新鮮な野菜やフルーツについては、食習慣や宗教に関係なく、多くの学生が求めている点である。9月にアメリカのボストン大学やアメリカン大学を訪問・見学した際、食堂だけでなくコンビニエンスストアでも、新鮮なサラダやフルーツが豊富に品揃えされていることが標準的であり、生協でも対応が求められる。

他には、土日や朝の営業時間の延長、食品やメニューの原材料表示を求めている声があった。

## 2. 調査のまとめ

今回の調査から、以下のような点が明らかになった。

### (1) 国際学生の生活実態について

#### ① 経済生活について

2008年経済危機の影響で経済状況は厳しくなっているが、国内学生ほど見通しは暗くない。生協の価格が高いという声も強いが、日本の物価高に起因すると思われ、国内学生が求めるデフレの「安さ」とは異なると思われる。

#### ② 大学生生活

国内学生と比べて、勉学を中心とした留学の目的意識が明確なので、充実度という意味ではやや厳しく見ているが、概ね充実度は高い。

#### ③ 食生活

大学生生活の重大関心事ということではないが、食生活に関する関心は高い。栄養バランスの取れた食事や、野菜やフルーツをとることに注意を払っているが、十分に出来ているとは感じていない。また、朝・昼・夕の基本食事の摂取率は国内学生よりも高く、食事のリズムができていけると言える。

国際学生は、基本的には「朝食は自炊、昼は生協食堂、夜は自炊」という特徴が強く見られる。生協ショップでパンや弁当を購入して食事をとる割合は、実際の生協ショップの利用状況を見ても、減少している。特にAPハウスでは、食費の節約ということもあるが、自炊率が高く、食料品の買物頻度も市内マンション居住者よりも高い。

### (2) 生協の課題について

生協に対する評価として、食堂に対する評価は概ね好評だが、国際学生・国内学生を問わず、メニューの価格についての不満、栄養バランスの取れたメニューや野菜・フルーツの充実が強く求められていた。これまで生協に寄せられてきた声に十分対応できていなかった部分であり、できるだけ早く対応が求められている。また、ハラールメニューの充実や野菜を多く使ったメニューの充実は、宗教や食習慣に関係なくメニューの選択肢を広げ、多くの学生が栄養バランスを考えながら利用することができ、全体として生協食堂の満足度を高めることにつながる。

## IV. 研究のまとめ

今回の調査・分析から、本研究には以下の意義があると考えられる。

### 1. 日本で学ぶ留学生の生活実態に踏み込んだ日本で初めての本格的な調査。

留学生にかかわる問題は、重要な問題として認識されているが、いまだ体系的な調査分析がなく、本調査が留学生の先駆的な生活実態調査となる。

### 2. APUで学んでよかったと思えるキャンパスづくりへの貢献。

メニューや品揃えなど具体的なリクエストに対して個別に応える取り組みは、APU開学以来継続して取り組んできているが、困っていることやニーズへの対応はまだまだ改善の余地が残されていると考えられる。学生が参画しながら生活協同組合らしい取り組みを通じて、食の安心がAPUでの学びの安心を実現することができる。

### 3. 立命館大学での生協事業の発展。

APUでの調査分析や事業の取り組みを先進事例として、グローバル30を推進する立命館大学においても、生協事業を発展させる提起となる。

## VII. 残された課題

### 1. 調査結果について

今回の研究報告で触れられなかったアンケート調査の分析データや自由記入欄への回答を含めて、別途詳細な調査報告書を作成する。その際、当初予定しながら実現できなかったスチューデント・オフィス(APハウス分室)と調査結果の共有化を行ない、日頃、国際学生に接している中で感じていることをヒアリングする。また、国際学生との懇談を通じて、生活実態や生協への要望についての生の声で今回の調査報告を補完したい。

### 2. 今後の事業活動の具体化について

第一に、生協食堂の評価に見られる不満への改善が求められる。価格やメニューについてこれまで寄せられてきた声に対応できていなかったことが多く含まれており、業務の中ですぐに取り組んでいけるように検討を進めたい。第二に、食事の摂取状況や意識については、事

業活動だけでなく啓蒙活動として、栄養バランスの取れた食事の採り方や健康提案が求められる。その際、生協だけでなく、ヘルスクリニックなど大学の各関係オフィスとも連携しながらすすめていくことが求められる。

### 【注】

- 1) 一般的な意味においては留学生という表現を採用するが、APUについて論じる場合には国際学生という表現を使用する。
- 2) 日本学生支援機構『留学交流』では、毎年、大学や学校等での留学生の生活支援の取り組みを特集し、紹介している。vol.20, No.4 2008年、vol.21, No.9, 2009年など。
- 3) 京成大生協のハラフードのとりくみは、大学生協連京滋・奈良地域センター編『食の講座－20年後の「体」「心」「社会」をつくる－』コープ出版、2008年、pp179-181。参照。これ以外にも英語や中国語の講座を企画し、留学生が講師を勤め、受講料の一部をアルバイト代にしている（大学生協連合会機関誌『UNIV.COOP』Vol.364, 2009年5月号）。
- 4) イスラム法によって食べられるものをハラル、食べてはいけないものをハラムとして分けられている。ハラル肉とは、「神の御名において」と唱えながらムスリムによって頸動脈を切断されて屠畜された動物の肉を指す。酒や豚肉もハラムとされ、一般に市販されている醸造アルコールの入った醤油も禁止されている。食材だけでなく、例えば鶏肉を油で揚げる調理機器についても、ハラル用とそれ以外に分けることが求められる。
- 5) 『立命館アジア太平洋大学誕生物語』中央公論新社、2009年、pp198-202。
- 6) APUでは、毎年、栄養士の協力を得て生協主催の食生活相談会を行っており、食事を抜くだけでなく、極端に偏った食事や無理なダイエットを続けている国際学生の健康実態が明らかになっている。
- 7) 組合員数49,155名（立命館大学、立命館アジア太平洋大学、附属中学・高校含む）、事業高6,374,366千円（2010年2月末現在）。主な事業として、食堂事業、書籍事業、購買事業、旅行事業、共済事業、不動産斡旋事業を行なっている。学生数6,000名を超えるAPUキャンパスには、食堂とショップがそれぞれ1店舗ずつある。
- 8) 立命館大学ホームページ、プレスリリース、2009年7月3日付。[http://www.ritsumeijp/press/detail22\\_j.html](http://www.ritsumeijp/press/detail22_j.html)
- 9) ヨーロッパでは、ポーランド・プロセスに基づき、各国教育省や高等教育機関が協力して世界的な学生支援サービスの充実をすすめている。ドイツでは、ドイツ学生支援協会(DSW)が食堂、学生寮、奨学金や学資ローン等経済支援の3本柱の事業を行ない、留学生対応事業を強化している。2009年12月に日本で開催された高等教育における学生支援・サービスを考える国際セミナーでの講演録が『大学生協経営資料』No.148, 2010年4月に掲載されている。

- 10) 京都大学、東京工業大学、法政大学などがWeb上でも閲覧できる。富山市や山口市など多くの自治体で実施。日本学生支援機構が実施した「平成19年度私費外国人留学生生活実態調査」では、留学後に苦労したことで、27.3%が日常生活における母国の習慣（生活習慣、宗教等）との違いを上げているが、その具体的な中身については触れられていない。また、調査票が日本語（ふりがなあり）で書かれているため、一定程度の日本語能力がないと回答できないものとなっている。留学生の適応については、モイヤー康子「心理ストレスの要因と対処の仕方～在日留学生の場合～」『異文化間教育』第1号、1987年、横田雅弘「留学生支援システムの最前線」同、第13号、1999年、中山亜紀子「大学コミュニティにおける異文化トランス」同、16号、2002年など。
- 11) 全国の大学生協が毎年実施している生活実態調査。経済事情を始め、意識、食生活、読書、日常生活、生協店舗への評価などの調査分析を行なっている。2009年で第45回を数える。
- 12) 大学生協連京滋・奈良地域センター編、前掲書、第1章および第2章。日本の大学生の食事摂取や食育に関する学術的調査や研究については、人見恵里、高木麻里子「本学学生食堂の利用自体と改善への取組み」『山口県立大学学術情報（看護栄養学部紀要）』2009年3月、福田小百合、池田順子「学食における食教育の取組み」『京都文教短期大学研究紀要』第47号、2008年など。
- 13) APUでは、1週間ごとに自分たちの文化や歴史を紹介するマルチカルチュラルウィークという取組みを行なっている。学生自身が食堂の厨房に入って調理や出食したり、食堂での飾りつけや紹介ブースの設置、伝統舞踊のパフォーマンスなどを行なっている。APU食堂のエスニックメニューには、こうした国際学生の取組みから生まれたものが多い。
- 14) 国内学生と国際学生が共同生活を行なう学生寮。2009年11月現在で世界74カ国・地域から1,252名の寮生が生活している。国際学生は入学後1年間をAPハウスで過ごし、ながら日本の文化や習慣を学び、国内学生も新入生の約半数が1年間入寮することができる。立命館アジア太平洋大学のホームページ <http://www.APUmate.net/aphouse/index.html> を参照。
- 15) 回生を聞く設問は、春入学と秋入学のあるため、国際学生が理解しやすいように「セメスタ」で質問したが、本論では一般的に馴染みのある「回生」に読み替えている。また、サンプル数の少なさや分りやすさを考慮して、本論の中では「9セメ以上」「大学院生」「短期交換留学」についての分析は行なわない。
- 16) 国際学生と国内学生の区分について、今回の調査では日本国籍を有する学生について国内学生とした。一定期間日本に居住している場合は国内学生として扱うAPU入学基準の区分とは異なる。
- 17) 各食事と食事場所の設問の中で、国内学生の食事場所について選択肢に一部不備があったため、データは分析から外している。

## The situation of international students' diets at Ritsumeikan Asia Pacific University and issues for Co-op business.

ISOZAKI, Shuji (APU Shop Manager, Ritsumeikan CO-OP)

ITO, Noboru (Senior Researcher, Research Center for Higher Education Administration)

SAKAI, Katsuhiko (Executive Director, Ritsumeikan CO-OP)

### Keywords

International students, Global 30, food awareness, nutritional balance, Consumers' Co-operative

### Summary

Many international students are now studying at Japanese universities since the plan to attract 100,000 international students was established. In light of the experience of the engagement of the Ritsumeikan CO-OP at Ritsumeikan Asia Pacific University, the selection of Ritsumeikan University as one of Japan's Global 30 universities for promoting internationalization means that dietary improvements will be indispensable to help alleviate the homesickness of the increasing number of international students and enable them to enjoy a healthy, fulfilling lifestyle during their studies. In this study, we surveyed the situation with respect to the diet of international students enrolled at Ritsumeikan Asia Pacific University and elucidated future business issues for the Ritsumeikan CO-OP.

We found that although international students have a greater awareness of food compared with Japanese students, they not only face problems with time and money, but also feel that because they lack knowledge regarding food they are therefore unable to achieve a nutritional balance, regular lifestyle, and vegetable and fruit intake. In health terms, even if this is not bad enough to cause immediate problems, a high proportion were worried about their state of health. We showed that both improvements to the food menus provided by the CO-OP and educational outreach to international students concerning food and health will be required in future, in collaboration with the Health Clinic and other university institutions.